

北野 慶

(きたの けい)

略 歴

一九五四年栃木県に生まれ、神奈川県で育つ。北海道大学文学部哲学科卒業。出版社勤務を経て、三年間の韓国生活で日本語講師を経験後、韓国語翻訳者。学生時代から小説を書き始め、小説集『極北のレクイエム』（彩流社）がある。著書は他に、『コリアニッポン新研究』（柘植書房新社）、『韓国病診断』（亜紀書房／柳智尚名義）、『のむな、危険！——抗うつ薬・睡眠薬・安定剤・抗精神病薬の罠』（新評論）など。



〈受賞のことば〉

奇しくも本賞と同じ日に発表された今年のノーベル文学賞の受賞者ボブ・ディランが、ある歌について「霊がぼくを選んであの歌を書かせた」と語ったことがあるそうです。天才アーティストに擬する気は毛頭ありませんが、『亡国記』を書き終えたとき、実は私も、「私以外のなにかが私を選んでこの小説を書かせた」という気持ちを抱いたものです。

3・11は私にとって、それまでの人生観・世界観はおろか、生活そのものまで変えるほどの人生の一大事でした。そしてその後、紆余曲折を経て、ほぼ十年ぶりに、それも全く新しい分野の小説を書くことに私を向かわせました。その結果が、本賞受賞という僥倖につながったことは、私を大いに励ましてくれます。

しかし同時に、フクシマがなければこの作品がなかったこと、今もこれからもフクシマの被害が続いていくこと、そしてこの国に原発が存在する限り、私たちは常に「第二のフクシマ」の危険性と隣り合わせに暮らしていかなければならないことを思うとき、単純に本賞の受賞を喜んでばかりはいられない、いえ、喜んでばかりいてはいけないとも思うのです。